

島田先生を偲び奉る

田 波 又 男

一

昭和四年四月東京文理科大学が創立せらるゝや、島田先生には漢文學科主任教授として一高より御榮轉なされた。然しこの御榮任は前より御内定のことゝて三月末の口頭試問には松井、諸橋兩先生と共に高等師範寄宿舎の監務室に端然と控へられて居つた。三月とはいへ寒い日であつた。順番が來て恐るゝ部屋に入つて敬禮すると、先生は如何にも鄭重に御答禮なされた後に、おもむろに口を開かれて

「これまでどんな本を好んで讀んで居つたかね」。

「入學したら何を専攻するつもりかね」。

「經學か文學かね」。

などとお尋ねなされた。この時候は初めて島田先生の溫容に接したのであつた。御令名は前から承つて居つたが、近く拜眉の榮を得て、何處となく威嚴のある謹直な方であると思つ

た。恐らくこれは僕許りでなく、他の諸君も同様の感にうたれたことゝ思ふ。

二

漢文學科第一回の入學生は、内野熊一郎、小林信明の兩君と僕の三名であつた。草創の際として研究室とは名ばかりで、初めは國文學科と同居して居つたが、後別れて體育教官室の入口右側の小さい室に書棚と机とを置いて、漢文學科學生の控室兼研究室といふことで暫く我慢した。西館も未だ完成しない頃なので、東館の各教室を轉々として歩いた。今でもよく覚えて居るが、東館の南側階下の狭い小さい部屋で、十人足らずの學生と共に、先生から禮記の御講義を拜聽した。先生は先づ學生に讀ませてから後、音吐朗朗と範讀された。成程先生が漢學の大家、島田重禮博士の御後嗣だけあつて、お家の學問はどことなく品があると思ひ乍ら拜聽した。其の外

東洋史學科で御講義なされた二十二史劄記も拜聴した。先生は經學に御造詣深いことは勿論、史學にも大變御趣味を有せらるゝ様に承つて居る。御令息の俊彦君が帝大の國史學科御出身の若き篤學者であることも、先生のかゝる御趣味を繼がれたものとゆかしく感じて居る。二年になつて儀禮、三年になつて公羊傳の御講義を拜聴した。今やあの如何にも貴公子然たる溫容と、親しみ深い聲咳に接することが出来ないかと思ふと、甚だ寂寞の感に耐へない。

三

先生の教育方針は、即ち我が文理大漢文學科の學風の基礎をなすものである。先生は先づ僕達入學匆々の學生に向つて「人間は先づ目的を定めたならば之を飽くまで貫徹せねばならぬ。例を漢學にとれば、一旦經學の中の何を研究すべきかと目的を定めたならば、五十年の間それに向つて精進したら必ずものになる。單にこれは漢學許りでなく、其の他の事に就いても同様であると思ふ」。

と、お仰しやり、先生が青年時代、帝大内に設置された古典研究所の同期生に例をとつて諄々と説かれた。漢學の實力をつけるには先づ讀書力の養成にあるといつて、大いに樸學を

獎勵された。即ち學生は先づ研究の發表を急ぐより實力の養成が大切であるとされた。先生は先年上野精養に於ける古稀祝賀會の席上御挨拶の中に

「私は官を辭してから幾分餘裕のある體となり健康狀態もよいから大いに斯文の研究に向つて精進したい」

と、先生はかうお仰しやつた通り、實は詩經公羊學の研究に就いて着々と歩みを進められ、未だ御發表の運びに到らなかつたが、幾多の稿を筐底深く藏されて居つたとのことであるこれ先生が御永眠なさるまで教育者として實踐躬行の範を示された眞摯な態度と謂ひよう。

我が文理大の漢文學科が諸橋教授の「行不由徑」、經によつて經を解する漢學の大道を進めといふ御啓示と、内野教授の「何事にも先鞭をつけよ」といふ御教訓を奉じて着々と研究を進め、今や創業時代より生々發展の道に向つて大行進をなしつゝあるは、實に其の端を島田先生の教育方針に發して居るといつても過言ではあるまい。現在の方に花咲き實結ばんとする時期に達するまでには、幾多の試練と困難とに打克つて根強き根柢を作つて下さつた先生に對して、衷心より感謝と敬意とを表する所以である。

四

先生は漢學者の家に生れ、始終謹直であらせられたので、逸話等といつて特別取立てゝ申上ることがない。その謹直な一面を物語るものとしては、松井簡治先生との御交遊並に支那御旅行中の事どもを松井先生から承はつて居る。即ち先生は御壯年時代は相當酒を趣まれ、中々強かつたさうであるが、晩年になつて健康上醫者から禁ぜらるゝや、その忠告を實によく守つて居られたといふ。長い支那旅行中如何におすゝめしても一度も杯を手になれなかつたといふ。これを以ても先生が己を持すること如何に謹嚴であるかが分る。授業中に於ける御態度も實に嚴然たるものがあつた。下準備が不充分であると

「もつとしつかり讀んで來なくては駄目じやないか。大いに勉學せよ」

などと思つて居られることは、眞向から率直に申されて後は又平常通り氣持よく話された。

先生は又門弟子を思ふの念厚く、僕が昭和七年五月末上海から凱旋して上京するや、間もなく下落合のお宅で、學生全部を御招待され、お家族の方まで加はつて祝賀會をお開き下

された。この時などは始終ニコ／＼されて、本當に我が子の凱旋を祝ふ慈父の様な御態度であつた。僕はこれまでに恐らくこの時程、和かな感激の場面はなかつたらうと思ふ。

昨年の十月小澤君が北京留學に出發される前、その送別會を淺草の某料亭で開いた時などは、病苦を推して御出席なされその行を壯んにするため、立つて大いに激勵の御言葉を賜はつた。その後で

「現在の日支事變はその根ざす所深く、やり出した以上これを徹底的にやつつけねばならぬ。中途半端で止めるならば其の禍根を長く残すことにならう」。

と、その時の氣慨ある先生の御態度は、儒學者といふよりは正に三軍を叱咤する武將の威風あり、私共は聽いて居つて大いに意を強うした。宜なるかな先生が御病床につかれて、病は日毎に篤く、十二月十日頃はかなり御苦しみの御様子であつたに拘はらず、我が 皇軍の南京城附近に迫つたといふ號外を御覽になり、大變お喜びになつたといふ。先生の御臨終は十三日の午後三時頃と承はつて居るが、その數時間後には先生が最も氣にされて居つた南京陷落は光華門の一角から崩れ完全に我が軍の勝利となつた。

嗚呼、あの古武士の面影のあつた、而して非常に情の厚かつた先生は今や幽明所を異にして、永遠の眠につかれたのである。國家非常時の折柄、多年對支文化事業に御盡力なされ今後益々先生の御指導御活躍を願はなければならぬ重大な時機に先生の如き先覺の士を失ふことは、單に漢學界のみならず、國家の一大損失と謂はねばならぬ。然し先生が其の御創立に御盡力なされ、且御指導なされた我が文理大の漢文學會は、年と共に榮え、幾多の新進氣鋭の士を世に送り、その活躍は今から期待されて居る。而して先生の豫言された苦難の漢學界にも春が廻つて來て、先生が多年育成された幾多の人材を必要とする時代は遂に來たのである。我々は大いに發奮努力して學術に將又、實際教育に劃期的の功績を擧げ、以て先生の御靈を慰むべきものと思ふ。聊か蕪辭を連ねて以て先生を憶ふ追悼の辭と致します。

(昭和十三年二月二十七日)